玄冬のはなびら

小林守城

文学の本質は反体制にあり
自ら袖口を引かれるまま
東京キャンパスの裏庭で聞いた
希望のことば
こころ病む同窓の戦士たちの
懐かしいことば

文学の本質は反体制にあり
今なお誰かが担っているのだろうか
シールズ　？
やさしく飢えていた
おれたちの暗い青春
なけなしの権力のやり口に似た
辛く厳しい望郷の歌

＊　＊　＊

夏休みになると麻切りだ
開拓されゆく麻群には
魔物がいたし
蝮も百足もかくれていた
父も母も近所の人も
年に一度のまつりのように
ことばを掛け合う傍らで
子どもらは麻の香りに
くらりくらり
そこそこ賑わいの
お邪魔虫の手伝いだ

祭りの終りは　おエンさん
今年もゆらゆら気が触れて
田圃の畔の誘蛾灯へ
南方の島で戦死した
一人息子のことだろう

殺してやるーくたばりころせー
だれをころせか分からぬまま
麻切り包丁を振り回した
未亡人のおエンさん

＊　＊　＊

麦踏みの歌は早春の風物詩として
たくさん詠まれてきた
そして冷たい風や光になお
いのちの再生を黙々と念じてきた
だがその風物詩の裏で
寒く貧しく娘を売り
人目を避けるように
頬っかぶりしてきた人たちのことを
写生の詩歌人は拒否してきた
むしろ想像力の問題であった

ひとたびは捨てたる故郷麦を踏む　稲村

寒風に麦踏む去年（こぞ）の娘売り　守城

＊　＊　＊

雲を掴むような言葉はするな
排泄は野にするにかぎる
男も女も文明の特権をもって

書物は数ページを残して
あしたの希望とする
失いし原風景がそこにある

文学は時代の危機に向き合って
霧を呑むような位置に立ち
雲に手の届く山頂や野辺であれ